
機動戦士ガンダム00 ～ A streak of a ray ～

野見宿禰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00\A streak of a ray\

【Nコード】

N9747S

【作者名】

野見宿禰

【あらすじ】

西暦2307年 人類は枯渇した化石燃料に代わるエネルギー源として太陽光発電システムを手に入れたが、その恩恵を巡り各国は軍備開発競争、内乱、紛争などの争いを続けていた。……そんな世界に『変革』という楔を打ち込みんとする者たちが現れるのだ。これはオリキヤラ介入によるファンフィクションストーリーです。あとこれはこのサイトのやり方に慣れる試作的意味合いが強いのでご容赦を

プロローグ

地球のとある大陸のとある国のとある山奥に誰にも見つからぬように隠されて存在するラボ。

そこで少年は？ソレ？を見上げていた。

先程まで再生されていた映像データは再生を終えると自動的に消去された。おそらくそれは情報漏洩を防ぐためのものだろう。

このラボに入るまでの事を考えればそれは当然の事だと、少年はつい数十分前にこのラボに入るまでの十を超えるセキュリティを思い返す。

そのセキュリティの全ては仕掛けたラボの人間と自分でしか解除することができないように造られていた。

そして、再生された映像データはラボの人間　すでに亡くなった両親からの遺されたメッセージであった。

メッセージの内容はそのどれもが今まで知ることのなかった事実。

だが、そんなことよりも　いや、今はその事実よりも目の前のモノが自分の全ての意識を引き込んでいた。

？ソレ？は両親が遺したもう一つのモノ。

一身に受ける照明の光を反射し、白き輝きを放つ神々しい様はまるで天からの御使いの如く。

少年が見上げるは一機のモビルスーツ。

「
ガンダム
」

一話 ソレスタルビーイング（前書き）

一話だから普通に原作通りの話

一話 ソレスタルビーイング

西暦2307年 世界は大きく三つの国家群に分かれていた。

一つは、米国を中心とした世界経済連合 通称『ユニオン』。

一つは、中国・ロシア・インドを中心とした『人類革新連盟』。

最後に、新ヨーロッパ連合 『AEU』。

この三つの国家群は赤道上に建設された三本の軌道エレベーターのいずれかを、枯渇した化石燃料に代わる太陽光発電システムのエネルギー供給源として、それぞれ一基ずつ所有していた。

軌道エレベーターは全長五万キロメートルにも及ぶ巨大建造物だ。その長さは地球の直径の約四倍である。それが三本、地球を取り囲むように突き刺さっていた。

しかし、軌道エレベーターはその巨大さから防衛が困難であり、構造的にも非常に脆い建造物だった。そのため、各国家群は所有する軌道エレベーターに軍事力を配備し、三本の軌道エレベーターは高度一万キロメートルと三万六千キロメートルの二ヶ所を軌道リングで繋いで堅牢化されていた。

軌道エレベーターには主に二つの役目がある。

一つは、宇宙・地球間の物質の移送。エレベーター内を走るリニアトレインによって宇宙空間と地球との往復は、旧時代のロケットに比べて安価かつ安全に行うことが可能となっていた。

そしてもう一つは、太陽光発電システムによるエネルギーの供給。宇宙空間に配置された大量の発電衛星によって発生させた大電力をエレベーターはケーブルを通じて地上へとおろすことで、かつて世界中を席卷した化石燃料の代替物として過不足なく円滑に機能している。

この軌道エレベーターを建造するために世界は三つの国家群に集

約された。全長五万キロメートルという巨大な建造物を完成させるためには、それだけの資金力と技術力が必要とされたのだ。

そして、約半世紀という長い歳月と巨額の費用が投じられて三本の軌道エレベーターは建造された。これによりエネルギー資源不足の不安は一扫され、宇宙開発という輝かしい未来を歩むための新しい道が切り開かれたのであった。

人々はそんな輝かしい未来を待ち望んだ。

しかし争いはなくならなかった。

三つの国家群は、己の威信と繁栄のため、大いなるゼロサム・ゲームを続けていた。

さらに世界には民族紛争、宗教戦争による内乱が各地で続いていた。

二十四世紀に入ってもなお、人は争うことを止められないでいた。

「ガンダムエクシア、ファーストフェイズの予定行動時間を終了しました。……セカンドフェイズの開始予定時間に入ります」

宇宙空間の静止衛星軌道上を隠れるように航行するソレスタルビーイングの多目的輸送艦プロレマイオス。そのブリッジでは四人のクルーに加えて一人のゲストがいた。

「さて、あいつらはちゃんと帰ってくるのかね」

クルーの一人で戦況オペレーターを務める少女、クリスティナ・シエラの作戦状況推移を聞いたゲストの青年、サイト・セントラル

は笑みを浮かべていきなりとんでもないことを口にした。

「縁起でもないこと言わないでください!」

突然の彼の言葉にクリステイナは驚きながら激昂するも、サイトはその笑みを崩さずに言う。

「いやー、緊張した空気を和らげようつつ俺なりの配慮と?ほんの少しの?悪戯心だよ」

「うわ、本音ダダ漏れ」

サイトの素直過ぎる言葉に、彼とは同年代の友人である操舵士のリヒテンダール・ツエーリが呆れる。

「今は作戦行動中ですよ」

そんなサイトにクリステイナは注意する。

「しかし、うまくやってるのか、刹那とロックオンは?」

そう言ったのは砲撃士のラッセ・アイオン。ちなみに彼は予備のガンダムマイスターでもあった。

刹那とロックオンは今現在、セカンドフェイズを行っているであろうガンダムマイスターである。

「やってくれなきゃ、ソレスタルビーイングはそれまでってことで」

「俺はいらん心配だと思いがね」

「今さつき縁起でもないこと言っというてなに言ってるんですか」

クリステイナの鋭いツツコミが飛ぶ。

「ねえ？」と、クリステイナは自分と同じ戦況オペレーターのフェルト・グレイスに同意を求める。

「……………」

しかし、彼女はサイトを軽く一瞥しただけで無言で自分の作業に戻った。

相変わらず寡黙でクールな娘である。表情の変化に乏しい彼女の笑顔は実にレアだ。…………いや、彼女以上に笑った姿を見てみたいシークレットな奴がトレミー（ここ）のマイスターにはいるのだが。

サイトが半ばどうでもいい思考に入ろうとしたところで、この艦の戦術予報士兼艦長代理、スメラギ・李・ノリエガがブリッジへと入ってきた。

「そう堅くなることはないわよ。クリス」

「ですが」

「私たちソレスタルビーイングの初お披露目よ。ド派手にいきましょ」

「それに、今の俺達ができることはあいつらの帰りを待つことだけ……勿論、不足の事態に備える必要はあるがな」

「サイトの言う通りよ。だから気楽にいきましょう」

大人の女性らしい長い髪をかきあげなら、そう軽い調子で言ったスメラギは手に持ったボトルに口をつけた。

「あーっ、お酒飲んでる！」

「マジですか!？」

「いいでしょ、私は作戦を考える係。あとのことは任せるから」

またボトルを口に運ぶスメラギにサイトは苦笑する。

「あんたは艦長代理でもあるでしょ」

「代理よ代理。あくまでも。……それとも、何か不都合がありましたか、『観察者』さん？」

「まさか」

スメラギの含みのある微笑みにサイトは肩を竦めた。

「今回の作戦のファーストフェイズ…… AEUの最新型イナクトの撃破、刹那とエクシアなら間違いなくクリア。その後のセカンドフェイズ…… AEUに条約以上の軍備力があることを明るみに出すことも問題はないでしょう」

AEUイナクトはユニオンのフラッグを基本設計に太陽エネルギー対応などの改良こそあれ、ガンダムとの性能差は歴然。パイロツ

トが余程の腕前でもまず失敗はない。

そして、いかに条約以上の軍備力とはいえ、エクシアとデユナメスのガンダム二機で十二分に対応できるのは『ヴェーダ』で検証済み。

今頃は

「ガンダムエクシアおよびガンダムデユナメス、セカンドフェイズの予定行動時間を終了しました」

クリスティナがセカンドフェイズ終了時間を告げた。

「サードフェイズも、ティエリアとアレルヤがちゃんとやってくれるでしょう」

そう。ガンダムマイスターである彼らなら今回の作戦を必ず成功させる。

「それは……同じ『ガンダムマイスター』としての言葉かしら？」

ただ一人、ガンダムマイスターでありながらガンダムを所有していない、『観察者』としてこの場にいる青年。果たして彼は今、どのような気持ちでここにいるのか、スメラギは気になった。

いや、スメラギ以外のクルー達も気持ちは同じなのか、サイトに目を向けていた。

「それは勿論」

サイトはそれに気づきながらも無視して、目の前に広がる宇宙の景色を見つめながらはっきりと言う。

「俺の言葉ですよ」

ファーストフェイズを完了したガンダムマイスター、刹那・F・セイエイは乗機GN-001《ガンダムエクシア》を駆って軌道エレベーターに向かっていった。

アラートが鳴った。

モニターに後方から接近する機影の情報が映し出される。

機影の数は三。機体パターンからその正体はAEUの主力モビルスーツ《AEUヘリオン》だと解る。

ヘリオンは今回のファーストフェイズの作戦目的であった《AEUイナクト》の前代機で、モビルスーツ形態と飛行形態の二つの形態を持つ現主力機だが、基地以外での変形はできない。

視認したヘリオンは飛行形態。刹那は瞬時にそれに対応する戦法を知識から照らし出す。

するとヘリオンの一機からリニアライフルが放たれる。

エクシアは即座に機体を横にずらしてそれを躲す。

そのまま刹那はエクシアの体勢を整えてヘリオンの三機編隊と対峙する。

エクシアは右手に展開されたGNソードの刀身を折り畳み、ライフルモードに切り換えると、そのトリガーを引く。

ヘリオン三機は放たれたビーム弾を避けてエクシアに接近する。

エクシアは再びGNソードの刀身を展開し、ヘリオンの一機をすれ違い様に切り落とす。機体を切断された一機は地に墜ちていく。

残された二機は旋回してエクシアに向けてリニアライフルを掃射

するが、エクシアはなだらかな機動性で全ての弾を回避する。

それを見たヘリオン二機の動作には動揺の色が伺えた。

ガンダムは現存する全てのモビルスーツを超越する性能を有しており、この程度のことは造作もないのだが、ガンダムを知らぬ彼らはそうもいかなかった。

刹那はその隙に二機を墜とそうとしたが、軌道エレベーターから九つの機影が増援として迫っているのを映したモニターを確認する。

「やはり、A E Uはピラーの中にまで軍事力を……これは条約に違反している」

今回、刹那が担った任務の本当の目的は、別施設に配備されているだろう部隊を動かし、A E Uの軍隊規模が条約以上のものだと露呈すること。

そして、計画通り現れた部隊に向けて刹那はエクシアを上昇させる。

これからの展開も、すでに戦術予報士が予報している。

『敵機増援、敵機増援』

遠方に軌道エレベーターが眺める荒野の一角、そこのある無数の岩に隠れるように待機するG N - 0 0 2《ガンダムデュナメス》は長距離射撃武装G N スナイパーライフルを構えていた。

「ははっ、流石の刹那でも手を焼くか？」

そのコックピットで寛いでいたロックオン・ストラトスは、シー

トの真横に配置された独立AI式球形小型汎用マシン《ハロ》の報告に陽気な笑みを浮かべながら望遠カメラを覗いた。

「なら、狙うとしようか」

ロックオンは射撃用スコープをセットして、接眼モニターを覗き込む。

「行こうぜ、ハロ。ガンダムデユナメスと、ロックオン・ストラトスの初陣だ！」

ロックオンが構えると、デユナメスの頭部にあるV字形アンテナがスライド下降してツインアイを覆い、高精度ガンカメラとなる。ガンカメラの照準が標的を捉える。

そして、ロックオンはトリガーを引いた。

GNスナイパーライフルから放たれたビーム光線は、標的となったヘリオンの翼部を寸分の狂いなく撃ち抜いた。

更に一機、また一機と撃ち抜き、ロックオンはにっこ笑みを浮かべる。

「デユナメス、目標を狙い撃つ！」

四機、五機、六機と次々とデユナメスの射撃にヘリオンが落とされていき、最後の一機をエクシアが一閃、斬り落とした。

それを確認したロックオンはスコープから顔を離れた。

「セカンドフェイズ、終了だ。」

人革連の静止衛星軌道ステーション『天柱』、その管制室にて管制官は、いつもより多くEセンサーに反応するデブリに違和感を覚えた。

部下はそれに大した問題はないという風に言葉を交わす。

上官もいつもなら気にしないのだが、今はこのステーションで電力送信十周年記念式典が催されているため、念を入れてモニターによる視認を命令した。

「な、なんだ……？」

モニターに映し出されたのは、ところどころで発光する何かステーションに繋がる衛星機器をデブリから護るためのシールドの周辺でいくつかのスパークが起きていたのだ。

そして、拡大した映像が映し出す光景は、複数のモビルスーツがシールドに接触しながら飛行し、火花を散らせていたものだった。

「モビルスーツだと!？」

管制室の全員が確信する。

アレはテロ組織だと。

「バカな、デブリに紛れるなんて……!」

「シールドの干渉で、機体どころか人体にだって……!」

直後、シールドに接触をしていた一機が爆散。

「言わんこっちゃない!」

「それだけの覚悟ということだ。……第三防衛隊にスクランブルを要請しろ！」

確かにシールド付近はその機能故にセンサーに反応することはないが、シールドに接触しながら接近すれば先程の一機のヘリオンのように爆散してしまう。だからこそ予想外だった。

こんな所までテロ組織の侵入を赦してしまうとは、と上官は第三防衛隊のティエレン宇宙型が出撃するのを見届けながら苦渋の表情を浮かべた。

第三防衛隊のティエレン宇宙型三機は敵機の機影を捉えるも、それは接触予定ポイントから大きく離れていく。

『敵、軌道を変更。……くそっ、リングに隠れやがった！』

兵の一人が忌々しげに言う。

「追っぞ！」

『隊長、我々だけでは……！』

「諦めるな！」

隊長は隊員に渴を入れると、軌道リングの影に隠れるように飛ぶ敵機ヘリオンに発砲する。

しかし、その銃弾が命中することはなかった。

ステーションに接近していくヘリオン二機が運ぶのは箱型のミサ

イルランチャー。その蓋が開き、射撃体勢に入った。

「敵、射撃体勢に入りました！」

管制官の一人が吠えるように報告する。

だが、対応する間もなく発射された三本のミサイルは、噴煙を上げて真っ直ぐにステーションに向かう。

「直撃コースです！」「迎撃、間に合いません！！」

しかし、三本のミサイル全てがステーションに着弾することはなかった。

いずこから飛来したビーム光線が、三本のミサイルを破碎したのだ。砕け散ったミサイルの破片がステーションの破片にぶつかるが、大した問題にはならなかった。

「何だ、あの機体は！？」

放たれたビームの発射元から自分達の部隊を高速で追い越した機影にティエレン宇宙型のパイロットが動揺する。

その機体はオレンジと白のカラーを持つMA 戦闘機形態の機体。ガンダムマイスターの一人、アレルヤ・ハプティズムが駆るGN-003《ガンダムキュリオス》。

「大したものだ、スメラギさんの予報は」

キュリオスのコックピット内で、アレルヤは感嘆する。

これまでのテロ組織の行動と防衛隊の対応全てを予測しての今回の作戦には一切の綻びがなかったのだから。

キュリオスが向かうテロ組織部隊のヘリオン二機が素早くリニアライフルを構えて、迎撃する。キュリオスはそれを軽々と避けてGNサブマシンガンを連射する。

二機は被弾し、撃墜されるが残りの一機は更なる加速でステーションに向けて突進した。

「特攻……？ 全くテロリストってのは！ ティエリア！」

アレルヤはすでに待機している仲間の名前を呼んだ。

それに応えるように、特攻を仕掛けるヘリオンの前に、光の粒子を纏う一機のモビルスーツが現れた。

その時、ステーション内全ての通信機器が麻痺した。

現れたのはガンダムマイスターの一人、ティエリア・アーデが操るGN-005《ガンダムヴァーチェ》。黒と白の、これまでのガンダムよりも重装甲な機体である。

「ヴァーチェ、目標を破壊する」

ティエリアが操縦桿を動かすと、ヴァーチェは右手に握られているGNバズーカを胸の前で固定し、両手で支え構える。

ヴァーチェのGNドライブが輝き始めると、呼応するようにGNバズーカの砲身の奥から光が充満していく。エネルギーのチャージである。

そして、エネルギーが充填されると、GNバズーカから極太のビームが放出される。

圧倒的な破壊力を孕んだ巨大なビームはヘリオンの機体を丸々包み込み、溶解していく中、機体が限界を迎え爆発する。

ヴァーチエがGNバズーカを下げた。

「サードフェイズ、終了」

「やりすぎだよ……全く」

ティエリアの宣告に、アレルヤが呆れたように呟いた。

『……地球で生まれ育った全ての人類に報告させていただきます。私達はソレスタルビーイング。機動兵器ガンダムを所有する私設武装組織です』

『天柱』で起きたテロを未然に防ぐサードフェイズ終了から数刻後、全世界に対してとある声明が流された。

ビデオメッセージという形で映されたのは、頭髪は禿げ上がり髭を生やした初老の男性が、どこかの書斎を思わせる部屋で一人椅子に座って、静かに語るものだった。

『私達、ソレスタルビーイングの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶することにあります。私達は自らの利益のために行動はしません。戦争根絶という大いなる目的のために、私達は立ち上がったのです。』

ただいまをもって、全ての人類に宣言します。領土、宗教、エネルギー……どのような理由があろうとも、私達は全ての戦争行為に対して武力による介入を開始します。

戦争を幫助する国、組織、企業なども我々の武力介入の対象となります。

私達は、ソレスタルビーイング。この世界から戦争を根絶させるために創設された武装組織です 』

多目的輸送艦ブトレマイオスのブリッジでは、そこにいる全員が固唾を吞んで声明の放送を目にしていた。

これがソレスタルビーイングの？本当の？始まりなのだから、この緊張も当然である。

ついに始まったのだ。

長い時をかけた計画が。

「ハレルヤ……、世界の悪意が見えるようだよ」

アレルヤが黄昏るように呟いた。

これからの自分の行為を覚悟して。

その覚悟の意味は違えど、ティエリアも険しい面持ちで呟く。

「人類は試されている。ソレスタルビーイングによって」

ガンダムマイスターに失敗はない。

その決意を表すように。

同時刻、刹那・F・セイエイとロックオン・ストラトスも南太平洋に浮かぶ無人の孤島で、携帯端末をもって声明の放送を観ていた。

「始めちまったぞ……ああ、始めちまった」

ロックオンは自分に言い聞かせるように呟く。

「もう、止められない」

引き返せない。

進むしかない。

もう決めたのだから。

『止マラナイ止マラナイ止マラナイ』

足元で跳ねる八口を気にすることなく自身に再度、再確認するよう
うに傍らに立つ刹那に言う。

「おれたちは世界に喧嘩を売ったんだ。わかっているんだろうな、
刹那」

「ああ、わかっている」

刹那はわかっている。

だからこそ今ここにいる。

かつて戦場を駆けた少年は忘れない。

自分を救ったガンダムを。

神のごとき姿を。

？あの日？から少しでも近づこうとしてきた至高の存在。

「俺たちはソレスタルビーイングの、ガンダムマイスターだ」

自分もガンダムになるために、刹那はエクシアに乗る。

その頃、声明が放送される少し前にプトレマイオスを発ったサイト・セントラルは個人用移送船の操舵室にて映像を眺めていた。

「さて、世界はどう答える？」

世界を変革せんとするこの愚者たちに。

「クク……」

サイトは笑う。これから見届ける世界がどう変わるのかを待ち焦がれるように。

例え、ガンダムに乗らずとも、ソレスタルビーイングとなった自分には罪を背負う義務がある。

そんな覚悟はとうにできている。

自分は見届ける。

彼らが、そしてソレスタルビーイングの創設者、イオリア・シユヘンベルグが求めた世界（理想）を。

そこに至る世界（現実）を。

それが自分に課せられた使命であり目的。

だが、彼の真意は誰も知らない。

もしかしたら、彼自身も。

一話 ソレスタルビーイング（後書き）

人物紹介

サイト・セントラル

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターであり観察者を務める青年。

しかし、マイスターでありながら自身はガンダムを所有していない。そのため、基本的に観察者として行動することからマイスターの中で唯一一般的な生活を送っている。

普段は陽気で人当たりの良い性格だが、その実やや人見知りであり客観的に物事を測るクールな面を持つ。

本名はリオ・ベルツ。21歳。

二話 リオ・ベルツ

ユニオンの中心国家、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州サフオーク郡ボストン市。

その大都市中心部に位置するビル群と住宅密集地の境にある高層マンションにサイト・セントラルはいた。そして四十階建ての三十三階に、彼の部屋がある。

？サイト・セントラルではなく、リオ・ベルツの？。

リオ・ベルツ。サイト・セントラルの本名であるその名は世界的にも広まっている。

数十年に一人の天才として。

その才覚は十を迎える頃には頭角を表し、公表した論文はかの天才MS技術者、レイフ・エイフマンすら唸らせた彼は『天才少年』としてユニオンだけでなく瞬く間に世界中の注目を浴びた。

彼は義務教育を終えると 義務教育時からあらゆる名門大学からの推薦を受けていたがそれは悉く拒否していた 世界的に名を連ねる四つの大学を渡り歩き、その全てを主席で卒業した。

それが数カ月前のこと。

世界の注目を一身に受けた天才は、今現在表立って何もしていない。

特にMS工学技術に秀でたその才能を買われてユニオンの軍事関係からスカウトの熱いラブコールを受けていたが、彼が最後の大学を卒業してから行なったのはNGO団体に参加してのアフリカや中東へのボランティア活動である。

それを終えてアメリカに帰ってきたのは二ヶ月前。

何かと世界の話題になった天才が次に何をするのか注目されていたところに現れたのが私設武装組織「ソレスタルビーイング」である。

彼らの出現は正に世界の注目の的となった。

おかげでリオ・ベルツは騒ぎ一つなく宇宙からの帰還ができた。

彼らはまだ完全に人々の関心を惹き付けてはいないが、今現在何もしていない一人の天才より関心を受けるのは至極当然であった。リオもそれがわかっていたからこそ敢えてこの空白期を作った訳だが。

『サイト・セントラル』として少しでも動きやすいように。

そして、自身の部屋で『監視者』への報告を終えたサイト・セントラルは、『リオ・ベルツ』として外に赴く。

彼の数少ない友人に会うために。

ユニオン工科大学MS工学専攻研究所。

ユニオンMS工学に特化したこの大学にある学際的研究所であるここではユニオン管理下のもと、学生により試作MSの機体や武装の開発・研究及び、パイロット専攻の学生テストパイロットによる稼働実験が行われており、多くの優秀な人材を輩出している。

かつてリオ・ベルツも学生として所属していた。

そして、ここにはリオの友人もいた。

「リオ！」

所内にある食堂のテラスで一人紅茶を啜っていたリオは自分を呼ぶ声に振り向いた。

そこには笑みを浮かべてこちらに向かってくる二人の男女の姿。

「や、元気そうだね」

男の名はダレン・マツヤマ。技術開発専攻としてこの研究所でMS工学の研究に携わる優秀な学生で、マツヤマという名前と特徴的な黒髪からわかるように彼の血筋には日本人がおり、彼は日系三世である。

「ずいぶん久しぶりじゃない」

「たまには連絡よこしなさいよ」とその隣で呆れたように笑う女性はアナスタシア・チエルク。この研究所でパイロット専攻の生徒として所属する、灰色の瞳が印象的なロシアからの留学生である。

そして、二人はリオ・ベルツの友人である。

リオも久しぶりに出会った二人の友人に笑みを浮かべる。

「久しぶりだな。元気そうでなによりだ………ところで」

だが、その笑みはすぐに別の含みで深まった。

愉しげに口角を吊り上げて、リオは目の前の『カップル』に問いかける。

「お前らどこまでいった？」

「「なあっ

！！！？」」

見事に揃って顔を紅くする二人を見て、リオはやっぱりかという態度で言う。

「なんだ、進展なしか」

「うつつっさいわね！ ああんたには関係ないでしょう！？」

震えた口調で睨み付けるアナスタシアにリオは肩を竦める。

「いやいや、付き合っても未だキスの一つもないあまりにプラトニックな関係にはお二人の親友として心配してんだぜ？」

「余計なお世話よ！！ だいたいキスならもう

あ」

思わず口走ってしまった言葉に気づいてアナスタシアは慌てて手で口を被うがもう遅い。

「ほおー」

すでにリオの目は獲物を捉えた獅子のそれと変わりなかった。

「それは、いつ、どこで、誰からやったのかな？ おじさんに詳しく」

「うつつっさい！ 黙れ！」

ニタニタといやらしい笑みを浮かべて紅潮したアナスタシアに問いかけるリオに、今まで傍観していたダレンがため息をついた。

「リオ。もうその辺でアナスタシアをからかうのは止めてくれないかな？」

「いや、こいつには散々つばら振り回されてきたから。からかえるところだからかわないと」

と学生時代に彼女の都合で色んな勝手に付き合わされてきた事を挙げると、同じく付き合わされてきたダレンが苦笑う。

「まあ、気持ちわかるけど」

「ちょっとダレン!？」

「でも、もうボクの彼女な訳だし。それくらいにしてほしいね」

「へー……もしかしてキスをしたのはお前からか？」

「まあ、ね」

やや照れ混じりに肯定するダレンに、随分と大胆になったものだとリオは感心した。

それから二人がテーブルに着くと互いにそれぞれの二ヶ月のことを話した。勿論、ソレスタルビーイングに関する事柄は暁して。

そして、

「それで聞いてよりオ！ ダレンったらさ、ちまちま『君には白兵戦より射撃戦の特訓が必要だ』なんて言ってフル装備のリアルド相手に試作射撃武装だけのアンプに乗せようとすんのよ？ あり得ないでしょ！？」

「何言ってるんだい。君がいつも射撃を疎かにするから実戦データでほとんど白兵戦のものしか録れないから注意したんじゃないか」

「は？ ダレンがMSの戦闘はまず射撃からの牽制がどうかーってMSにおける白兵戦をないがしろに言ってたじゃない！」

「そんなことは言ってるさ。君はいつも得意の白兵戦で挑もうと無理矢理突撃してってるけど。それはリアルドやフラッグという機動型MSだから出来ることだけど、君はロシアの出身で、いずれは人革連のパイロットになるだろうからその時に乗るティエレンのマニュアル通りの」

「マニュアルが実戦で何の役に立つって言うわけ？」

「じゃあ今の君の戦い方がティエレンでも出来るというのかい？」

「んなわけないでしょ。そもそも私、軍人になるなんて一言も言っていないし」

こんな感じでさつきから痴話喧嘩が続いている。しかも何の色気もない内容で。

『夫婦喧嘩は犬も食わぬ』と言うのが確かに雑食もわざわざ食おうとする話じゃないな。

というか聞いた限りこいつら優秀とはいえ学生のくせに結構好き勝手やってるな。

「ところで……」

しかし、このままじゃあいつ終わるのかも分からんし……仕方ない。あまり話題にしたいくない話なんだが。

「お前ら、ソレスタルビーイングについてどう思う？」

すると、いつの間にかそれぞれの大国の主力機であるフラッグとティエレンの性能について熱く語っていた。しかも何故かユニオン出身のダレンが人革連のティエレンについて、人革連出身のアナスタシアがユニオンのフラッグについて。二人の動きがピタリと止まり、同時にリオの方に振り向いた。

「ソレスタルビーイングって……あの紛争根絶を謳ってテロ紛いなことやってる集団のこと？」

「そういえば、つい先日セイロン島でも武力介入を行なったみたいだね」

ダレンの言う通り、ファーストミッションによるソレスタルビーイングの声明から丸一日かからぬ内に、ガンダム四機がセイロン島の旧スリランカ領に出現、武力介入を行なったのだ。

「ああ、紛争の平和的解決というお題目で、十年前から人革連がタミル人に肩入れしたおかげで紛争は悪化。あそこは無政府状態にまであつた訳だが」

「本当の目的は、セイロン島東部の海底を通る太陽エネルギーケーブルの安全確保って言われてるわね。……人革連の人間としては少し痛い話だけど」

アナスタシアはコーヒーの入ったカップを揺らしながらそう言った。

そんなアナスタシアを見てからダレンは言う。

「だけど、結局タミル人とシンハラ人の民族紛争はまだ終わる気配を見せない」

「それはそうでしょ。三世紀も続いてる紛争がたった一度の横槍程度で終わるわけじゃないじゃない」

そんな簡単に争いが終わるなら、この世界の争いは総て終わっている。それはこの場の三人誰もが思っていること。

「ま、もしソレスタルビーイングってのが本気で紛争を根絶しようっていうなら、また来るんじゃない？」

「紛争が終わるまでかい？」

「たぶんそうなんじゃないの？ てゆーか、そんなこと私に分かるわけないでしょ」

「それもそうだ。ボク個人としては紛争根絶よりもあのガンダムという機体について気になるところだね。そう思わないかい、リオ？」

「そうだな……」

ダレンの問いにリオは適当に相槌を打ちながらもう冷めてしまった紅茶を啜る。

そして、アナスタシアの言う通り、今日、セイロン島に二度目の武力介入が行われようとしていた。

陽も沈もうとしている頃、研究所から帰ったリオはエレベーターで三十三階まで昇ると、自宅に向けて内廊下を歩いていた。

「さて、確か今日は」

リオはこれからの予定を思い返していると、自宅の玄関前に一人の青年が立っていることに気づき、その表情が引き締まる。

空色の髪に端正な顔立ちをした青年はリオを視界に入れるや、真っ先にこう言う。

「サイト・セントラル。アレハンドロ様がお呼びだ」

「わかっている」

こうして、『リオ・ベルツ』は再び『サイト・セントラル』となる。

二話 リオ・ベルツ（後書き）

人物紹介

ダレン・マツヤマ

ユニオン工科大学でMS工学を専攻する学生でリオの親友。日系三世にして彼の家は世界の有数の財閥の一つで彼はその御曹司でもある。

お人好しで基本的に損をする性格だが、MSに対して並々ならぬ情熱を持ち、論争となると誰にも止められない。最近ではガールフレンドのアナスタシアに対しても強気の姿勢を見せている。

すでに卒業後にユニオンの軍事施設に着任することが決まっている。21歳。

アナスタシア・チエルク

ユニオン工科大学でMS工学のパイロットコースを専攻するロシアからの留学生で、リオの親友。

男勝りに勝ち気な性格のお転婆娘であり、いつもリオとダレンを振り回しており、その性格からMS戦闘では白兵戦を好む。ボーイフレンドのダレンとは真逆の気質だが、おかげで噛み合っている節がある。21歳。

三話 変革の影（前書き）

本文もだが、それ以上にタイトルに困った（そしてこの様である）

三話 変革の影

ユニオン所属MSWADの本部ビルにはAEUの最新鋭機イナクトの視察から帰投したグラハム・エーカーとビリー・カタギリがいた。彼らは上官である大隊長の呼び出しを受けて大隊長室に入室した。

「グラハム・エーカー中尉、ビリー・カタギリ技術顧問、只今到着いたしました」

「ご苦労だった」

大隊長は執務机で書類の整理をしながら二人を迎え入れた。

「AEUの新鋭機視察のはずが、とんでもないことになってしまったな」

「あのような機体が存在しているとは、想像もしていませんでした」

グラハムはわずかに嬉々とした表情で語る。彼は視察先での目撃だけでなく、帰投中にガンダムとの戦闘を行い、その性能を体感していたのだ。

「研究する価値があると思いますが」

カタギリの進言に大隊長も頷く。

「上もそう思っているようだ」

大隊長は書類から目を離すと、引き出しから二通の命令書を取り出し、二人に手渡す。

「ガンダムを目撃した君たち二人に、転属命令が下りた」

グラハムは受け取った書類に目を通した。

「対ガンダムの調査隊、ですか？」

「新設の部隊だ。正式名は追って司令部がつけてくれるだろう」

「レイフ・エイフマン教授……教授が技術主任を担当するんですか？」

書類の中に見つけた恩師の名に、カタギリは感嘆する。

「上はそれだけ事態を重く見ているということだ。早急に対応しろ」

グラハムとカタギリは命令書を閉じて大隊長に敬礼した。

「はっ。グラハム・エーカー中尉、ビリー・カタギリ技術顧問、対ガンダム調査隊への転属、受領いたしました」

マサチューセッツ州からワシントンD・C.に向けて走る一台の車。その車内でリード・ルーラーは苦笑混じりに隣の助手席に座るサイト・セントラルに謝る。

「悪いね、サイト。事前に連絡できればよかったんだが、アレハンドロ様が久しぶりに君に会いたいと言ってね。……おそらく、これからしばらく面と向かって会う機会もなくなるだろうからね」

「意外とセンチメンタルなところがあるからな、あの人は」

サイトも窓から移り行く景色を眺めながら苦笑する。

二人が話すアレハンドロ・コーナーとは、ユニオンに所属する国際連合の大使にして代々ソレスタルビーイングの『監視者』を務めてきたコーナー家の党首である。

そして、リオ・ベルツの後見人でもあった。

十年程前にリオの両親が亡くなった時、両親の古い知人であった彼が養子縁組を申し出たのだが、結局は後見人という立場に納まった。

リオが天才として世界に注目されるようになったのはそれとほぼ同時期であった。

そして、軍人としては名を馳せても、まだ政治家としては新参者であったアレハンドロもこの時から更なる脚光を浴びたのだ。

リオがソレスタルビーイングの『サイト・セントラル』として活動することになったのもアレハンドロによるものであることは言うまでもない。

言うなればリオ・ベルツの恩人にしてサイト・セントラルの父とすべき存在なのだが、やはりそれほど単純なものでもなかったりする。

「何にせよ、互いに難儀なもんだな、リード」

「君ほどじゃないさ」

「いや、そうでもない。あの人には実際、感謝してるわけだし」

アレハンドロはリオ・ベルツに生活の支援だけでなく『サイト・セントラル』というもう一つの名と立場、そして生きる意味を見つける切っ掛けを与えてくれた。その事に関して感謝してこそすれ、恨む道理など微塵もない。

だから、これまで彼のために働いてきた。

それが唯一、とまでは言わないが、彼に対して自分が行える恩返しであつたから。

「……だからこそ……ここからは」

「？ 何か言つたかい？」

サイトの聞き取れね程に小さな呟きに、リードは前方から目を反らすことなく問う。

「別に。ただの独り言だよ」

「……………まあ、そういう事しておくよ」

何でもないように笑つて言つたサイトに、リードも気にしないと微笑う。互いに顔を見合わせることなく、道化の仮面を被つたよう

に。

三時間近くの運行の末、到着した場所はアレハンドロ・コーナーがプライベートで利用する高級バー・ラウンジ。

リードを御して入店すると、すぐに目的の人物が目に入った。

そこにはもう一人、見慣れた少女の姿もあった。さらにカウントア席には二人の付き人がそれぞれいた。が、まずはメインへの挨拶を優先した。

二人は近づくサイトに気づく。

「お久しぶりです、おじさん」

「おお、サイト！ 久しぶりだな、会いたかったぞ。さ、座りたまえ」

すぐに席から立ってサイトの肩に手を乗せたアレハンドロは喜色を浮かべて自分の隣の席にサイトを誘導した。

確かに面を合わせて会うのは久しぶりだが、よく連絡を取っているだろうにと苦笑するサイトはそのままその席に座った。

「ご機嫌よう、サイトさん」

「そちらこそ、相変わらず御美しいお嬢さんだ」

「まあ、相変わらずお上手ですこと」

サイトのあからさまな世辞に可笑しげに笑う少女、王留美。どうやらソレスタルビーニングのエージェントである彼女も今回は同席

するらしい。

いや、正しくは自分がこれに同席するのか。

「ご苦労だった、リード。すまないな、私のわがママを聞いてもらって」

アレハンドロはサイトを連れてきたリードに労いの言葉をかけた。

「御安い御用ですよ。それでは、私はこれで」

「よろしく頼むよ、リード」

「何かあるのか？」

二人のやり取りを疑問に思ったサイトはリードに問う。

「ちょっとした頼み事だよ。では」

リードはそう答えるとアレハンドロと王留美に一礼して店を出て行った。

「では、そろそろ始まるようですから」

リードの退出後、すぐに王留美はテーブル上の三つのモニターを展開する。

「ああ、そうだね……と、君は何を飲む？」

腰を下ろしたアレハンドロは思い出したようにサイトに訊ねた。

「では、モンラッシエを」

「好きだね、君も」

そう微笑みながら、アレハンドロはスタッフに呼びかけた。
その横でサイトはモニターを操作する王留美に話しかける。

「お嬢さん、そのモニターはもしや」

「はい、今回のミッション映像です。勿論、リアルタイムのですわ」

彼女の返答にやっぱりかとサイトはモニターを眺める。

今回のミッションは南アフリカとタリビア、そして二度目のセイロン島への武力介入。それぞれロクオン、アレルヤ、刹那が担当する。

「さて、刮目させてもらうよ」

隣のアレハンドロも薄笑いを浮かべながらモニターに期待の目を向けた。

それぞれのモニターにミッション映像が映ったのは、それとほぼ同時だった。

そして、サイトは今最も気になるモニターに注目した。

セイロン島の人革連南部方面軍第一四駐屯地に到着したセルゲイ・スミルノフ中佐は担当する兵士に連れられて、飛行型のガンダムが

落としていったというコンテナを収容した格納庫へと向かっていた。

「こちらです、中佐」

案内された格納庫の中には全長十メートル近くはあるかという巨大なコンテナが置かれていた。その周りには技術者達が様々な調査を行なっている。

「ほう、これか。それで何かわかったのかな？」

「はい。君！」

兵士に呼ばれた技術者の一人が駆け寄る。

「セルゲイ中佐だ、ご説明を」

「はっ！」

技術者はセルゲイに対して敬礼するとコンテナの説明を始める。

「あれはモビルスーツの爆撃用オプションパーツです。材質はEカーボン。最新素材ではありますが、構造上、目新しい技術は確認されていません」

「搭載されていたミサイルは？」

「残留物を調査したところ、ミサイルは三　キロ程度の誘導タイプ。ちなみに、このタイプを開発している国やメーカーはありません」

「やはり、独自開発か」

セルゲイは顎に手をあてて小さく唸った。

同時刻、ユニオンのMSWADの機体格納庫ではカタギリが先にグラハムがガンダムとの戦闘で搭乗したユニオン軍主力MS、SVMS-01《ユニオンフラッグ》の機体状況を調べていた。

「機体の受けた衝撃度から観て、ガンダムの出力はフラッグの六倍はあると思うよ。……どんなモーターを積んでるんだか」

その背後でグラハムは先の戦闘を思い返す。

「出力もそうだが、あの機動性だ」

「戦闘データで確認したよ。やはり、あの機動性を実現させているのは……あの粒子だね」

「あの特殊粒子はステルス性の他に機体制御にも使われている」

「恐らくは、火気にも転用されてるじゃろって」

長い白髪をこさえた老人が杖をついて二人に歩み寄る。

「レイフ・エイフマン教授！」

カタギリは老人、レイフ・エイフマンの姿に驚く。確かに新設部隊の技術主任を任されていたが、すでにここにいるとは知らなかつ

た。

「恐ろしい男じゃ。儼らより何十年も先の技術を持つておる」

ガンダムが駆動する時に放出されるあの光粒子。ガンダム単体の大気圏突入を可能とし、機体にステルス性を持たせ、他のモビルスーツを凌駕する圧倒的性能を発揮させる。そのエネルギー源と考えられる光の粒子。

一体、あの粒子はどのような技術によるものなのか。

それが解る一番の方法は、

「出来ることなら捕獲したいものじゃ、ガンダムという機体を」

「同感です」

エイフマンに賛同するグラハム。

「そのためにも、この機体をチューンして頂きたい」

「パイロットへの負担は？」

「無視して頂いて結構。ただし、期限は一週間をお願いしたい」

「ほう。無茶を言う男だ」

しかし、不可能とは言わない。

「多少強引でなければ、ガンダムは口説けません」

「彼、メロメロなんですよ」

そこに、グラハムの携帯端末からコールが鳴った。

「スミルノフ中佐」

一人の兵士が慌てて駆けてきたのに、セルゲイが振り返る。

「どうした？」

「はっ、先ほど連絡が入りまして、ガンダムが現れたとのことですよ」

「場所は？」

「それが、ニヶ所ありまして」

「ニヶ所？」

「同時行動か」

報告を受けて戸惑う兵士と違い、セルゲイは冷静にそれが意味する事を悟った。

「止めておけ」

ガンダムの出現報告を受けたグラハムが即座にフラッグに向かう

のをエイフマンは呼び止めた。

「何故です！ 一機はタリビアです。ここからなら行ける」

「僕は麻薬などというのが心底嫌いだな。焼き払ってくれるというのなら、ガンダムを支持したい」

「麻薬？」

そこで、グラハムはタリビアでは密かに麻薬の密造密輸がされているという話を聞いた事を思い出した。

確か、その問題から小中様々な争いを各国と生んでいたはず。

まさか

「奴等は、戦争の原因を断ち切るつもりじゃ」

「三機目がこのセイロン島に現れただと？」

南アフリカとタリビアにガンダムが出現したという報告を受けてすぐに新たな出現報告が入った。

しかも、先日武力介入を受けたこのセイロン島に。

「はっ、第七駐屯地です」

それを聞いたセルゲイは言う。

「使えるティエレンはあるか？ 私が出る」

「中佐ご自身がですか？」

「私は自分の目で見たものしか信じんものでな」

ガンダムという機体の性能、この目で見極めさせてもらう。

セルゲイは人革連の主力MS、MSJ-06? -C《ティエレン高起動型》に乗り込み、第七駐屯地へと飛行していた。

ティエレンは地上用戦車から発展した設計思想の基、スピードよりも装甲や駆動力に重点が置かれており、各パーツ換装組み換えにより、砲撃型、対空型、宇宙型等の様々なタイプを持っている。

さらにコックピットは狭く、パイロットは立って操縦を行う。宇宙型に至ってはコックピット内が真空にされており、酸素の供給はヘルメットから繋がるチューブによって行われている。そんな様相とダークグリーンのパイロットスーツ、頭部を完全に隠した箱形のヘルメットから、他の陣営からティエレンは？生きた棺桶？と謂われている。

しかし、そんな機体でもセルゲイはこのティエレンというモバイルスーツを気に入っていた。

出撃してからしばらくして、第七駐屯地上空に到達したセルゲイ機は、駐屯地滑走路で四機のモバイルスーツがいるのを視認した。

内三機はグリーンカラーのティエレン地上型。もう一機は青と白のモバイルスーツ。

おそらくあれがガンダムであろう。

ガンダムは軽快な動きでティエレンの攻撃を躲し、右腕に装着されている巨大な剣でティエレンの胴体を易々と斬り落とした。

現行モビルスーツの中で最高の装甲を持つティエレンが両断された事にセルゲイは震撼した。あれほどの切れ味を持つ近接武装は世界のどこにも存在しない。

やはり、あの機体には何かある。

幸いにも倒された三機のティエレンのコックピットはどれも無事であった。これならパイロットにも問題はないだろう。
もしか、それがソレスタルビーイングのやり方なのか。

セルゲイ機は脚部のジェットエンジンを噴かして、ガンダムの前に降り立った。

ガンダムは剣を構えて、戦闘の意を示した。

セルゲイはティエレンに装備されている二〇〇ミリ滑腔砲を右腕から切り離して地面に落とした。

「火器を捨てた……」

右手にカーボンブレイドを構えたティエレンを見たエクシアのパイロット、刹那・F・セイエイは操縦桿を握る力を込める。

「試すというのか、この俺を」

このガンダムを。

先に動いたのはセルゲイの乗るティエレン。
脚部のジェットエンジンを噴かし、爆発的に高めた加速でガンダムに突撃する。そして、カーボンブレードを突きだす。
エクシアはそれに対して身を屈めると、すれ違い様に剣を振り抜く。ティエレンの右腕が宙を舞う。

「肉ならくれてやる！」

セルゲイは構わず、むしろそれを利用して旋回すると左腕でエクシアの頭部を鷲掴みした。そのまま一気に頭部を締め上げる。

「くっ」

刹那はその腕も斬り落とそうとするも、動きが制限されて満足に剣を振るえず、ただ刀身を叩きつけるだけとなる。

ティエレンの力がさらに加わり、エクシアの頭部が軋む。

このままいけば確実に頭部のパーツを引き剥がせる。そうセルゲイは確信した。

「その首、貰った！」

セルゲイは思い切り操縦桿を押し込んだ。

「やらせるかよ！」

瞬間、エクシアは肩口から何かを引き出した。

その先には、淡い赤の光。それはビームサーベル。

振り落とされたそれにティエレンの装甲は容易く溶かされ、切断

された。

ティエレンはバランスを崩して、後ろに仰け反る。

「うおおおっ!?!」

そして、エクシアはティエレンの右肩から袈裟斬りに斬り落としました。

片足だけになったティエレンはバランスを崩して倒れた。

「俺に触れるな」

エクシアは無造作に掴んだまま放さなかったティエレンの左腕を引き剥がすと、ティエレンに背を向けて戦場から離脱した。

「如何でしたか？」

端末からの中継映像を切ると、王留美はその内容について問う。

「なかなか楽しませてもらったよ。ただ、エクシアのパイロットにはやや危うさを感じたがね」

アレハンドロの感想にサイトは頷く。

「そうですね。おそらくあのティエレンのパイロットは人革連でも指折りのエースだったのでしょ。機体の性能差がなければどうなっていたか」

「そこが強みではあるのだがね。やはり、パイロットがまだ未熟な

ようだ」

「マイスターはこの軍でもエースになれる実力はあるんですがね」
それでもマイスターの中で最年少である刹那はその若さゆえの斑がある。

特に今回のような同格以上の相手であるとそれがわかる。

「その件に関してはもう少し様子見ということか」

神妙な面持ちで口に手を添えるアレハンドロに歩み寄る一人の少年がいた。

「アレハンドロ様」

少年はアレハンドロのすぐ隣で一礼する。

「お話のところ失礼します。そろそろお時間が」

「おお、そうか。すまない、リボンス」

「いえ」

薄緑色をした髪に整った顔立ちをした少年、リボンス・アルマー
クは柔らかな微笑みを浮かべて再度一礼した。その所作は非の打ち
所のない完璧かつ美しいものだった。

その相変わらずの完璧振りにサイトは一瞬、顔を歪めるも、それを隠して微笑う。

「久しぶりだな、リボンス・アルマーク」

「ああ、久しぶりだね、サイト・セントラル」

対峙する二人の青年は全く同じ微笑みを向けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9747s/>

機動戦士ガンダム00～A streak of a ray～

2011年11月7日22時10分発行